

“友好体験” いきいきと中国語で表現

第 32 回全日本中国語スピーチコンテスト

(公社)日中友好協会主催の「第 32 回全日本中国語スピーチコンテスト」全国大会が 1 月 11 日、東京・文京区の日中友好会館で開催された。全国 19 の都道府県大会を勝ち抜いた 18 人が中国語の能力を競い合った。出場者のスピーチ内容は非常に豊富で、日中間の友好や交流体験などが生き生きと語られた。

大会は、協会創立 65 周年の今年のスタートを切る恒例行事。昨年 11 月に行われた日中首脳会談を受け、新しい年を祝うとともに、両国関係の改善を期待する雰囲気の中で行われた。

主催者を代表してあいさつした岡崎温理事長は「日中交流の中で大切なのは民間交流であり、中国語学習はそれを支える。中国語で交流ができれば誤解もとけ、友達も作れる」と述べた。審査委員長を務めた塚本慶一・杏林大学教授は「皆さんがいつか日中交流の第一線で活躍すると信じている。高いモチベーションとプライドを持って力を出し切ってほしい」と激励した。

高校生・一般部門で第 1 位となったのは、徳島県代表の主婦、鎌田恵子さん。鎌田さんは「人としての成長を促してくれた中国人の親友との交流」を紹介し、自身が「中国語を学ぶことの意義」を強く訴えた。一方、大学生部門で第 1 位に輝いた奈良県代表で天理大学 4 年の丸尾佳美さんは、友好の第一歩は「先入観にとらわれないこと」だと説き、アフリカ人の青年との出会いを通じて感じた相互理解の大切さについて語った。

例年以上にハイレベルとなった今大会は、入賞者 9 人のうち 8 人が女性を占め、活躍が際立った。観覧席からは「中国語の魅力が伝わる大会だった」との声が聞かれた。審査を経て 9 人の入賞者が選ばれ、各部門の第 1 位には中国旅行の副賞が与えられた。入賞者に対する賞状の授与は、橋本逸男協会副会長が行った。

当日は、中国大使館の孟素萍一等書記官、陳滔偉二等書記官、王磊三等書記官のほか、



スピーチコンテストの様様。1 月 11 日、東京・文京区の日中友好会館で

荒井克之・(公財)日中友好会館常務理事、後藤雅彦・(一財)日中経済協会総務部長、泉川友樹・日本国際貿易促進協会業務本部、内藤裕之・(公財)国際文化フォーラム常務理事、飯高和子・書家(協会参与)ら来賓を含む約200人が来場した。

朗読優秀賞7人が発表続三義教授から “ためになる指導”

スピーチ部門の採点と審査の間には「朗読発表会」が行われ、優秀賞に選ばれた7人が表彰された。「朗読部門」は、大学・中高生・一般の3つに分かれ、それぞれ課題文が異なる。学習歴が浅い人が対象なため、スピーチ部門へのステップとして参加する人も多く、近年人気が高まっている。



表彰の後、7人が1人ずつ壇上で朗読を披露。それに対し特別審査員の続三義・東洋大教授(写真)が細かい改善点を指摘し、発音のポイントを伝えた。

続教授は、「日本語の発音やアクセントで中国語を読んではまっている」など日本人が陥りやすい誤り方を、分かりやすい例をまじえていくつか紹介。指導を受けた千葉県立成田国際高等学校3年の笛吹日和さんは「とても参考になり、ためになった」と話した。最後は、続教授自らが課題文を朗読し、ネイティブの発音を披露した。

講評 “友好の中身” 考えた内容を 東京外国語大学教授 加藤 晴子

全体的に昨年を上回るレベルの高さで、順位をつけるのにとっても苦労した。

質疑応答では、やや癖が出ていたようだ。質問に対応する力をもう少しつけてほしい。スピーチの場では、声の質が大きな印象を与える。持って生まれた声質はそれぞれあるが、おなかから出ていない口先だけの声と遠くまで届く声では影響も大きく違う。声質も意識してほしい。中国語がうまい人は、息継ぎの「吸う」音でさえもなんとなく中国語に聞こえるものだ。抑揚や感情の込め方は好みもあると思うが、やはり日中間で違いがある。どのへんで盛り上げて、どのへんで間を取るのかなど、今はインターネットでも中国語のドラマが見られるので、もっと練習を積んでほしい。

最後はスピーチの内容について。全般的に自分の身近な体験、等身大のエピソードが生き生きと語られていて楽しかった。また、中国で流行っている言葉も使っていた。ただ、さらに一步上を目指すためには、自分の体験談で終わってしまうのではなく、そこから日中が互いに学び合えるような、友好の中身を考えられる内容が望ましい。

各部門の第1位に聞く



自転車こぎながら娘と練習

★高校生・一般部門第1位 徳島県代表 主婦 鎌田 恵子 さん (写真右)

娘の幼稚園の送り迎えの時に、自転車をこぎながら大声で何度も練習した。毎日つき合ってくれた娘はスピーチの第一段落を覚えてしまったほどだ。「ママ、1番取ってくる?」。当日の朝、4時半に起きて見送ってくれた小学2年生の息子も頑張っていた母親の姿を知っている。「自分にさくお金と時間が無いんです」家事、育児に追われる中での大会準備。子供が寝てから原稿を書いた。指導する先生はいない。スピーチにも登場した米国在住の中国人の友人に、ネットを通じて何度も聞いてもらうなど、なるべく話す機会をつくった。「どんな状況でも話せるようにしよう」。包丁を持ちながら、歯を磨きながら、買い物の間、いろんな状況で練習した。「周りの人はきっとおかしな人だと思ったでしょう」と笑いながら振り返る。「子供が手を離れたら働かざるをえない」。だからそれまでは、中国語で仕事ができるよう磨きをかけ続ける。「成功体験ができたから、今後はめげても今日のことを思い出して、また頑張れます」

先輩との練習が活かされた

★大学生部門第1位 奈良県代表 天理大学4年 丸尾 佳美 さん (写真左)

栄冠の裏には、多くの人の支えがあった。「大学の先生や先輩のお力添えがあったからこそです」。全国大会に出場経験がある先輩2人が、質疑応答の練習を一緒にしてくれた。「やってよかったと思えるほど、先輩との練習は活かされました」

南方に留学したため、方言の癖がある。気を抜くと発音がくずれるのが弱点だ。「自分のスピーチを録音しては何度も聞き返しました」。先生の熱心な指導にも感謝している。春からは中国と関係のある企業で働く。事務職からのスタートだが、「レベルアップすれば中国へ出張する機会も出てくるかもしれない。いずれ中国と直接に関わる仕事を担当したい」。新しい目標を胸に、今後も中国語学習を続ける。通訳案内士の国家資格も取得したいと意気込む。

実は、周囲のプレッシャーから自信を無くし、今大会で成果が出なければ、いったん中国語から離れようと考えていた。「自信にはなったけど、『もっとやらないと』という焦りもあります」。意欲が戻ってきたようだ。